
人殺して呼ばないで！（仮）

木瀬暦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人殺しと呼ばないで！（仮）

【Nコード】

N8997Y

【作者名】

木瀬暦

【あらすじ】

舞台はどこか別の世界。

濡れ衣を着せられ人殺しと呼ばれた少年の物語。

「本当に嫌になっちゃうよねー」

（注）試験勉強する気が無くなった作者の暇つぶしの作品です。更新出来ていくかわからないしこの作品が処女作なのでもう文とか無茶苦茶です。

それでも仕方がないから、暇だからというそのあなた！
どうか読んでいってあげてくださいorz

因みにタイトルが（仮）なのは友人が考えたからです。やっぱり処
女作のタイトルは自分で考えたいです。

第5話改正しました。

第1話　看守と人殺し

何故こうなった…？

と、暗く冷たい檻の中で考えてみる俺。

もう何度目だろう、あの日のことを考えるのは？

「…はあ……」

ああ思い出ただけですぐに溜め息が出る。

もうこれで何回目になるかわからない。

よくさ、溜め息をつくとき幸せが逃げるよって言われんない？

まあ俺はよく言われること何だけどさ？

そのたびに思う訳よ、俺は溜め息で逃げるような幸せが欲しい訳じゃないんだ！って。

でも今こんな所でさこうやって愚痴ってる俺って結構不幸だよな？

ああ不幸、不幸。

そのことを考えると本当に溜め息って良くないのかもね？

だがしかし勝手に出てしまう溜め息。

それに伴う幸せの逃亡と不幸の来訪。

悪循環って奴？

つかあゝやだやだ。まあ悪循環って言葉自体は嫌いじゃないんだけどね？

…え？そんな事は聞いてない？

あら、案外冷たい。

いいじゃないそんな顔しないでよ。

…まあ、顔なんて見えないけど。
あれ？ちよつとイラってきた？
いいじゃない俺と君の仲だろう？

え？どんな仲だつて？
そりゃあアレじゃない？
やっぱり………

看守と犯罪者？

第2話〜回想〜

（3日前）

故国であるアマタ王国を抜けて旅に出てもう5年になる。

ああ、色んなことがあったなあと思い出を懐かしみながら旅を続ける。

昨夜泊めてくれたシトコ村という小さい村に住んでいるお婆ちゃんとお爺ちゃんに朝お礼を言っただけ旅を再会してからもうだいぶ時間が経つ。

陽が高く登りもう昼かという時分にとても大きな門が遠くに見えた。

「あはは、やっと休めるね。もうお腹ペコペコだよ」

と独り言を言う俺。

地図によるとアソコはラクト王国という国らしい。

自分の国も大きい方だがそこは自分の国より大分大きい。

ワクワクしながらスキップで向かっていると（何故か通りすがりの商人に笑われた）意外にすぐにたどり着いた。

うわ、すごい人。

「こんにちは！いい天気ッスねオジサン！」

機嫌がいい俺は門番のオジサンに挨拶を試してみる。

「誰がオジサンだ！俺はまだ25だ！」

怒られた。

「ご、ごめん。門番の人。俺旅の者なんだ。観光したいから中に入れてよ」

「入国証を見せろ」

「に、入国証？」

「なんだ、もってねーのか？じゃあ駄目だな、出直してきな」

落胆した。俺はもう美味しいご飯を食べる気満々だった。宿屋のかふかのベッドで寝る気満々だった。

…もう今更野宿する気にはなれない。

「…ねえ、門番の人？」

「ん？何だ？入国証持ってない奴は入れねーぞ」

「あつ！何だアレ！？」

「何だ？つておい！」

まさか本当にこんな手に引つかかるとは…大丈夫かなこの国の警備は。

「おい誰か、その男捕まえてくれ！不法入国者だ！」

……………え？

「やばっ！早く逃げないと！」

それから俺はもう持てる力を全て出し切ったの猛ダッシュ。
かくして俺は入国に成功（？）した。

第3話〜事件〜

不法入国から数十分後。

「やっと逃げ切れたけど…」

もうこれじゃどこの宿屋でも泊まれないし料亭にも入れないだろうな。

多分入った瞬間通報だよ…

さてこれからどうしようか？

一応武器は持つてるから追いつめられても何とかなるだろう。

でも出来るならばなるべく気づかれないうちに早く出国したい。

難しいけど路地裏とかを通っていけば何とか…。

と、思つて今いるゴミ箱の中から出てこっそりすぐそばの路地に入ろうとした。

「居たぞ!!」

瞬間気づかれた。

「早く逃げないとっ…!!?」

別に路地裏が行き止まりだったから驚いた訳じゃない。
そこにあつたのは…。

死体。十数人ほどだろうか？沢山の兵士、中には要人らしき人もいたが…。

皆同じように切り刻まれて死んでいた。

「……………は？」

「おい！こっちだ！こっちに入っただぞ！早く……………うわああああ！？」

「おい！どうした！？大丈夫か！？」

「なっ、何だこれは！？貴様何てことを！」

「ち、違う！俺じゃない！」

マズい、人が集まり始めた…仕方ない…。

「よつと」

「跳んだ！？なんて跳躍力だ」

「感心してる場合か！さっさと捕まえるぞ！」

ヤバい、ヤバい！不法入国者どころか大量殺人犯になっちゃったよ！？

店の屋根の上を跳びながら逃げていた俺はかなり焦っていた。

「残念ながら貴様はここまでだ」

だから上から降ってくる大きな火の玉にも気づかなかった。
俺が覚えているのはここまですな。

第4話　捕らわれの身

「…そうして今に至るわけさ。わかってくれた？」

「いや、もう凄く嘘っぽい」

「いやいや、証拠もないのにこの扱いは酷いよ…」

「だって剣持ってたじゃないか」

ん？

「あのさ、看守さん？何で俺が剣持ってたって知ってるの？後何故か看守さんの声俺があの時最後に聞いたあの声に似てるんだけど？」

「私は看守ではないのだが…まあ貴様の質問に答えるとあの時魔法を放ってお前を捕らえたのは私だ。ああ、心配するな。剣ならちゃんと拾っておいた。まあここから出られるかどうかもわからんがな」

やっぱりあんたか！って、

「え？俺出られないの？」

「そりゃあそうだろう。不法入国したうえに兵士十数人に国の宰相一人殺しているんだ、恐らく死刑は免れないだろうな」

「え、マジで！？違うんだよ本当に俺じゃないんだって！」

「諦めろ、ここはA級犯罪者が収容されている施設だ。ガードも固

いから脱獄も不可能だ」

「いや、まあ剣さえあつたら脱獄なんて簡単だけどね」

「ふふん、面白い冗談じゃないか」

別に冗談じゃないんだけど…。

「いや、ホントだって」

「ふん、戯れ言を」

「出来るってば」

「（……………プチッ）」

…プチッ？

「よし、よくわかった！そこまで言うならやってもらおうじゃないか！ほら！お前の剣だ！！返してやるからやってみるっ！！！！」

うわああああ！？怒ったよこの人！？何で怒ってんの！？

「ちょっと落ち着いてよ、何で怒ってるのさ！？」

「うるさい！これが怒らずにいられるか！！」

えー…どこの部分で怒ったのこの人？

（ガチャリ）

ん？誰か来た？

「ここにいたか。第三軍大将、イズミ・ハヤセ」

ええっ！？看守さんは看守さんじゃなかったの！？

「誰だ貴様は？」

「…ふん。言葉遣いになっていないようだな。まあいい、イズミ・ハヤセ、貴様は反逆罪で明日には処刑だ。私は貴様の後釜、ここを管理する権利と第三軍大将の地位は本日を持って私が受け持つことになった」

……。

「な、何！？そんな馬鹿な！」

「ふん、何を白々しい、宰相を殺しておいてよくもそんな演技が…」

「ち、違っ！それはこの不法入国者が…！」

「ああ、そうだな。君、無罪だよ。おい、お前、釈放してやれ」

「ハッ！」

「あー、どーもー」

「イズミ・ハヤセ、貴様は明日までここで拘束する。朝が来たら処

刑だ」

「くそっ！どうなっている…！？」

「ああ、顔もよく見えないがその君、私はもう行くからね、好きに出て行ってくれてかまわないよ」

「了解しました將軍殿」

俺はもう閉まった扉に小さくそう呟いた。

第5話　脱獄

新しい將軍様が出て行った後。

「くそつ、どうなってる…?」

「あーあ、捕まっちゃった」

「うるさい！ああ、もう…何故こんなことに…」

はあと溜め息を吐く元・將軍様。

「あのさ、溜め息吐くと幸せが…」

「やかましい、その話は半刻程前に聞いた」

「まあ、いいじゃん。それより、これからどうすんの?」

「貴様の知ったことではない」

「冷たいの」

「……どうしようもない。せめて王に謁見できれば…」

「王様にあっても無理だと思うけど?」

「何?」

「だってさ、宰相さん達殺したの多分あの人達でもう王様に嘘ばっ

か吹き込まれていると思うよ?」

「…何故そう思う?」

「この事件で得をしたのは先刻のオジサンと次の宰相さん。アンタの後釜があんたの直属の部下じゃあないってことは、まあ、新しい宰相さんが手を回したんだろうね。理由は…そうだね…ここはA級犯罪者が集まった施設なんでしょ? だから、第三軍隊の軍事力と犯罪者グループでつくられた私設軍隊の入手とかかな?」

なんか嫌な感じがする。俺はちよつと面倒くさい国に丁度いい(いや、勿論よくないが)タイミングで入り込んでしまったようだ。

「…成る程な…打つ手なしか」

暗い空間に沈黙が下りる。

「…あのさ、逃げちゃえば?」

「…言つただろう、不可能だ。そのことはここの管理をしていた私が一番知っている」

「言つたじゃない、可能だよ。そのことは俺自身が良く知っている」

「……………ここの檻と壁は特別製なんだ、強度が半端じゃない。魔法が使えれば脱出の為の穴ぐらいは作れるかもしれないが壁と檻には『消魔石』が含まれていて魔力も使えない。くそっ、せめて私の刀があれば…!」

「じゃあさ、俺が逃げるの手伝ってあげようか?」

「貴様が？出来るのか？」

「えい」

そう言つて剣を振る俺。

（パキンッ！）

特別製らしい自慢の檻は俺によつて綺麗にバラバラにされた。

「…え？」

「だから出来るっていったじゃんか。よし、準備は良い？はい、壁斬りまーす」

「おい待て！」

（ガララッ！）

俺が斬つた壁から光が入ってくる。俺はふと自分が話していたこの人は一体どんな人なんだろうと思ひ、後ろを振り返つてみて…なんというか…その…驚いた。

外から射し込んでいる光に照らされている今まで俺と話していた元・將軍様は、俺が見たことも無いような綺麗で長い黒髪をもつた若い女性だった。

「おい！ボーっとするな！」

へ？

「貴様！何をしている！？」

「おい！イズミ・ハヤセが逃げるぞ！」

やば！見つかった！

「だから待てといっただろう！」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？早く逃げないと！」

「オイ！待て！手を離せ！」

「逃げたぞ！応援を求む！それと誰かこの事をサギタ様に報告を！」

追ってくる大人数の足音と鎧のすれる音を背に俺は収容所の外壁を斬り裂いて俺たちは逃亡を開始した。

第6話　逃亡中

収容所から逃げ出した俺たちは迫り来る兵士たちから取り敢えずは逃げきっていた。

「足おつそ…」

発見されたときは内心焦ったが逃げ出してから1分程で追っ手を振り切ることに成功していた。

「鍛え方が足りないんじゃないの？国を守る兵士がこんな少年に逃げられるなんて」

「…お前は何者なんだ？その身のこなしといい剣の腕といい、何故私を助ける？」

「その話は今はいいじゃない。取り敢えずさっさとこの国を出ようよ」

イズミさんは何か釈然としていない感じだったが俺は無視して歩を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8997y/>

人殺して呼ばないで！（仮）

2011年12月20日22時52分発行